



有限会社武山工務店の2代目社長
 Vol.39 たけやま とみお
 武山 富雄さん

「縁の下の力持ち」と人は呼びます。困っている人を見ると、放っておけない気立ての優しい性格です。高校を卒業して5年間、就職で厚真町を離れましたが、故郷に戻って家業の工務店で働き、令和元年から2代目社長として手腕を振ります。人のつながりを大切にしながら町の発展に力を注ぐ武山さんに、仕事場で話を聞きました。

“人とのかわりに手間を惜しまず”

訪れたのは、内装工事が進むまちなか交流館で、手を止めて入口で出迎えてくれました。「本来であればお断りするのですよ」。開口一番に言われた言葉とは裏腹に、優しさに満ちた瞳で協力を約束してくれました。入口にあった丸椅子に座り、会話が始まりました。仕事や家族の話…。時間が進むにつれて、言葉が躍ります。「人と関わる時、仕事もプライベートも手間を惜しまないようにしている。長く付き合うコツだからね」。生き様を教えてくれる言葉でした。

胆振東部地震では、被災住宅の応急処置を買って出ました。「皆、大変だった。ただただ仕事抜きで、力になりました」とつぶやきました。また、機会を見てはごも園にお菓子を届けています。「小さい子どもたちに、何かしてあげたいの思いつかない。喜ぶあの笑顔が町の宝だしね」と武山さん。「自分がそうだったように、小さいころに楽しかったことって、大きくなって忘れてないね。あの子たちが、また、まちを元気にしてくれるんじゃないかなとも思うよ」。

趣味は「祭り」と教えてくれました。東京・浅草の三社祭を含め、多い年で年間30力所の祭で神輿を担ぎます。「無心になれて、心が躍る。何より見ている人が皆元気になるのがいいね」。手作りのモバイルハウスで寝泊まりしながら、祭りを巡ります。

6月中に、まちなか交流館の内装工事を終える予定です。訪れた建具屋さんとのすり合わせで残ったのは、屈託のない笑顔でした。「私たちも町も、同じ時を過ごしている。個人的な印象だけど、町は良い方向に動いていると思う」。時間をかけて築く人の輪が、マチの一端を支えていました。